

皇甫麟墓誌銘による制作

藤 森 大 雅 (大 節)

Hironasa (Daisetsu) Fujimori

《皇甫麟墓誌銘》は、北魏の延昌四年(五一五)、四月十八日の刻。誌石は一一六、八×七〇cm、銘文は全二十三行、一行四〇字に刻されている。清朝の咸豊年間(一八五一―一八六一)に陝西省鄠県から出土したとされ、石は大きめの長方形。初め收藏家として名高い端方が所持したとされている。

皇甫麟の伝記は正史には無く、墓誌の銘文によれば安定朝那の人、字は真駒。性格は奇抜で忠篤、学問に長じ、様々な官職を歴任した後、病にあい七十五歳の生涯を閉じたという。

書風は隸書の筆意が多く、また、異体字が多い点特徴であり、同時期の墓誌銘の書風と比較すると特異な趣を備えているが、素朴で自由な書きぶりに魅力が感じられる。

作者はこれまで北魏時代の《張猛龍碑》、唐代の《九成宮醴泉銘》等の楷書を基盤に作品制作を行ってきた。《皇甫麟墓誌銘》の書法はそれらとはまた異なる要素を多分に備えており、これまでに培っ

てきた書法をベースに、新たな要素を加味する上で《皇甫麟墓誌銘》をとりあげ、作品制作にあたった。

北魏の龍門造像記や墓誌銘の一部には、書法よりも刻法が書風に大きく影響しているものがあり、《皇甫麟墓誌銘》もその一つに数えられるであろう。全体的に細めの点画によって統一されているが、仔細に観察すると、極端に太い点画や文字があることに気付く。また、この太い点画の文字は銘文中の特定の位置に集中しており、なおかつ横画取筆部の右上方への跳ねといった銘石書の様式が混在する点は細い点画の文字と比べて明らかに異なる。これは書法と言うよりも刻法の影響によるものと看做せるが、結果的に《皇甫麟墓誌銘》には、細い点画の文字、太い点画の文字、そして太細混合の文字がある。以上のような太細の変化の自然で軽妙な趣や、時折現れる銘石書のような太い点画の文字がこの墓誌銘の面白さとして作者はとらえている。この趣が先にふれた作者にとつての「新たな要

素」である。

以下、《皇甫麟墓誌銘》の書法の特徴について、主に点画の形状や太細の変化という視点から私見をまとめてみたい。

【横画】

円筆を主体として、時に方筆を混じえている。起筆はコブをつけてように太いものから、細くおだやかなものまで多彩な表情を見せる。送筆は一定の太さで運筆するものが基本であるが、時に抑揚をつけて変化を持たせている。収筆は徐々に力を抜いたように細くなる傾向が強い。太く刻された文字群には《爨宝子碑》等に見られる波磔のような跳ねが共通して見られる。



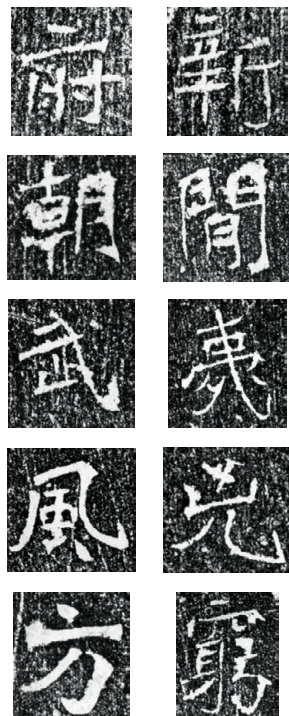
【縦画】

横画と同様に円筆を主体として、時に方筆が混じる。力の均衡によって文字を構成する北魏時代の楷書は縦画が左に傾斜するが、《皇甫麟墓誌銘》は垂直が多く、ハネをとまなう場合には曲線を描くような例もある。起筆が重く、収筆が軽いものや、反対に起筆が軽く、収筆が重いものなど、点画の形状は実に変化に富む。



【跳ね】

主に跳ねは針金を曲げたように太細の変化をつけず、やや長めに処理している。時に曲線を描くように丸味を帯びるため、穏和な雰囲気を感じられる。一方で太く刻された文字群はそのほとんどが鋭い三角形に作っている。こちらからは力強さが看取される。



【払い】

払いには極端な線の抑揚は見られない。右払いは払い出すまでの呼吸を長くするものが多く、直線的、曲線的の二種に大別できる。太く刻されている文字群（練・之）の払いには抑揚がみられ、肉筆のような豊かさが感じられる。

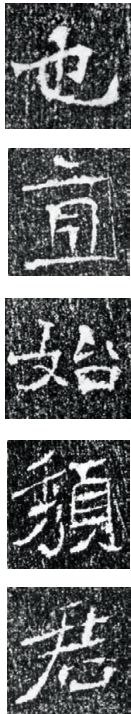


左払い（左払い）は起筆を軽く、払い出しを重くする例、反対に起筆を重く払い出しを軽くする例があり、それぞれの角度や長短は異なり、文字の均衡を保つよう計算されていると思われる。



【転折】

転折は肩を落とすような形が多く、北魏の楷書らしい力強さがある。しかし、行書のように肩を出さない、柔らかなものや、隸書のように二画に分けている箇所も散見され、その場合には転折部を放しているところもあるなど、多様である。



【点】

点も様々な表情を見せる。起筆から収筆にかけて右方向にむかってやや長めにするものが多く、時に右上がりになる。横画の収筆同

様、徐々に細くする傾向があり、鋭く強い印象を受ける。太く刻された文字群には丸みを帯びた楕円形状のものが多く見られる。



作品は方形の紙面に、十字の句を三行書きでまとめる構成をとった。細身で直線的な線を主体としつつ、太い点画を織り交ぜ、同時に線に抑揚を加えることで変化を意識した。字形は安定感のある文字構造を主体としたが、時折不安定な要素も取り入れ、《皇甫驎墓誌銘》の動的な部分を表現しようと試みた。

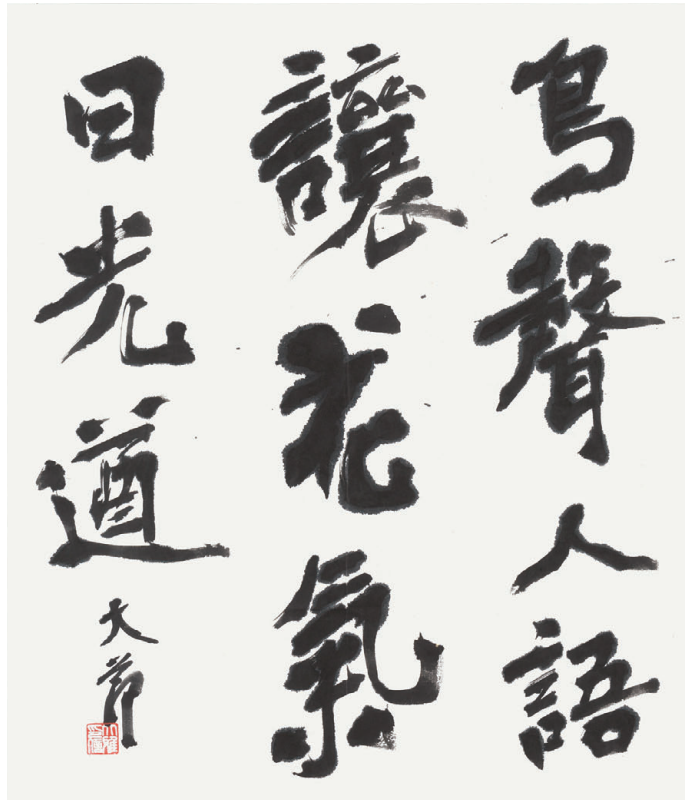
今回の制作では《皇甫驎墓誌銘》を基に、線の変化を課題として取り組んだが、変化を意識すればするほど、同時に作品としてのまとまりや統一感は難しくなる。そのあたりの客観性を見失わないことの重要性和、そのための学書の在り方について再考する機会となった。

〔用具用材〕

筆…和筆。純羊毛筆。

墨…和墨（宿墨）と墨液を混合したもの。

紙…本画箋。



62.5×53.3cm

鳥聲人語讓、
花氣日光適。